

---

# 森の魔女

トキ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

森の魔女

### 【Nコード】

N0113S

### 【作者名】

トキ

### 【あらすじ】

森の奥に住む魔女は、人を食う魔物だと恐れられていた。その元を、ある日一人の青年が訪れて。  
アンハッピーエンドです。読後にモヤモヤ感が残る話を目指してみました。

いつの頃からだろうか。

深い森の奥に住む彼女は、「魔女」と人々に呼ばれていた。

人里から離れてひっそりと住み、自ら人々の前に姿を見せることはない魔女は、恐れられ、そして同時に敬われもしていた。

彼女は、時折気まぐれに人々の願いを叶えることもあるが、けれど同時に、人を食らう魔物でもあると言う。

その姿がまるで歳を取ることすらも忘れたかのように永久に若いままであるのは、人を食っているからだ、誰もが信じて疑わなかった。

\*\*\*\*\*

こじんまりとした小屋の扉が数回叩かれた。

部屋の隅に置かれたソファに身を沈め、分厚い書物に目を通していた人物は、そのまま視線を上げることなく、黙々と色あせた頂を捲り続ける。

再び、耳に心地の良い音が躊躇いがちに響く。そこでやっと彼女が顔を上げた。深い翠の瞳を軽く瞬かせ、小さく溜息を落とし、やおら立ち上がる。

訪問者を迎える前に、床まで届く白いローブの裾と、赤みを帯びた艶やかな金色の長い髪を鏡の前で素早く整えることも忘れない。

ふと、自分の白い頬に、細い指先で軽く触れる。最近、肌に艶がないように感じている。軽く眉を寄せてから、彼女は扉に向かった。

「どなた？」

問いかけるが、答えはない。暫し待った後に、彼女は少女らしい仕草で軽く首を傾げる。ふわりと髪が一筋、頬に流れる。それを払うこともなく、扉をそっと押し開いた。

隙間から覗いたのは、降り注ぐ陽光の中に立つ逞しい青年の姿だった。がっしりとした引き締まった体躯に、目鼻立ちのはっきりした整った顔立ち。よほど急いで来たのかもしれない、その漆黒の闇色の髪は乱れ、広い肩は微かに上下している。

けれど、その表情は、彼ならば容易く手折ってしまえそうなほど華奢な少女を前にして酷く怯え、そして強張っていた。

「どなた？」

彼女　森の魔女は、再び静かに問うた。その声に、びくりと青年の身体が震える。

「お、俺は、この森の麓にある村から来た。決して怪しい者じゃない」

「怪しい者じゃない、なんて自分で言う人間ほど、素性なんて分からないものよ」

鈴を転がすような蠱惑的な笑い声を上げ、魔女は扉を大きく開け放った。そして身を引き、彼を我が家へと招き入れる。

「あなた、森で迷ったというわけではなさそうね。ここがどこだか、そしてわたしが誰だか知って訪ねてきた、そういうことね？」

魔女の言葉に、青年は曖昧に頷く。その視線は、小屋の中を忙しく彷徨う。

人ひとりが住むには狭過ぎも広過ぎもせず、ちょうど良い程度のその空間は、質素ながらも完璧なまでに整えられていた。

置いてある物も、取り立てて珍しい物ではない。鮮やかな緑色のクロスが掛けられた丸いテーブルに椅子、存在感のある背の高い書架、そしてその前には、座り心地の良さそうなソファがひとつ。部屋の奥には、細々とした生活に必要な物が揃えられ、几帳面に並べられていた。天井の梁には、たくさんのハーブの束が下げられている。

村にある民家と大して変わらない部屋に足を踏み入れた来訪者は、安堵すると同時に困惑したかのような、複雑な感情をその顔に浮かべていた。

「女性の部屋をそんなにじろじろと眺めるものじゃないわ」

言っていることとは裏腹に、その声音には若干くすぐったそうな、楽しい響きが含まれている。

そのやんわりとした窺<sup>たしな</sup>めに、青年は弾かれたように息を呑んだ。

「す、すまない。魔女の家なんて言うともっと……その、違うものだと思つてたから」

「薬の煮詰まつた大きな窯とか、不気味な動物の骸<sup>むくろ</sup>とかかしら？ 生憎、それはわたしの趣味じゃないのよ。毒薬の発する瘴気や生物の死臭よりも、澄んだ森の空気と、乾燥させたハーブの香りのほうが遥かに素敵だと思うわ。あなただつてそうでしょう？」

そう言つて、楽しげにクスクスと笑う。

本気なのか、それともからかうつもりで言っているのか。いまいち真意が掴めないとでも言いたげに目に戸惑いを浮かべながらも、青年は、彼女の問いに固い笑みを零すことで応えた。

「そんなに緊張しないで大丈夫よ。あなた、わたしが怖いんでしよう。わたしが人をバリバリと頭から食べる、なんて噂を信じてい

るのね。そんなことはしないわよ、安心して」

「そ、そうなのか？ 子供の頃からずっとそう教えられてきたから、そうだとばかり」

「そんな野蛮なことをするものですか。だいたい、この小さな顎でどうやって人の骨を噛み砕くって言うの？ それにわたしは、肉よりも庭で育てる野菜のほうが好みなんですからね」

大袈裟に肩を竦めて見せた魔女に、青年は、まだ完全に安心しきった様子ではなかったものの、それでもいくぶんかは表情を和らげた。

「それで、ここに来た理由は何かしら。食べられるかもしれない危険を冒してまで、わたしに頼みたいことがあるのよね？」

単刀直入に問われ、青年は逡巡する。けれど、それも僅かな間だった。ごくりと一度喉を鳴らしてから、はっきりとした声音で告げた。

「ある人を、生き返らせることはできるか？」

「ある人？」

「俺の恋人だ。俺達は、近いうちに結婚する約束を交わしていたんだ。けど、七日前に彼女は、病で……」

ふいに言葉を詰まらせ、彼は呻く。

それ以上の説明は不要だった。魔女は、そのようなことは容易い頼みだとばかりに、ただ小さく頷く。

「その恋人を生き返らせることは可能よ。でも、彼女の代わりとなる命が必要だわ。果たしてそれが、あなたにできるかしら」

「代わりの、命？」

「ええ。どんなものにも、それ相応の支払いが必要ってことよ。麦一袋には銅貨一枚、馬一頭には銀貨一枚支払うでしょう？ 人の命は、お金では買えないの。だから、それと同等の価値の物 つまり、他の誰かの命が必要なのよ」

「誰かの」

無機質に繰り返される青年の言葉を遮り、魔女は、戸棚から一振りの短剣を取り出した。飾り気のないそれを青年の前に差し出し、感情を籠めずに続ける。

「これで、代わりとなる誰かを殺しなさい。そうすれば愛しい人を、あなたの元に蘇らせてあげる」

小刻みに震える手で、恐る恐る短剣を受け取った青年の顔は、青く見えるほどに血の気を失っていた。身動きみしろひとつせず、手の中のそれを食い入るように見つめる。

やがて彼は決心したように小さく顎を引き、一言も漏らすことなく、その場を立ち去った。

胸に、その小さな希望を掻き抱いて。

\*\*\*\*\*

一日経っても二日経っても、青年は戸口に現れることはなかった。魔女は三日、そして四日待ち、五日目にはそのことを忘れかけていた。

庭に小さな籠を運び、甘いハーブを摘み取る。ステビアの葉を指先で摘み、己の鼻先でくるくるといたずらに回す。

今日はカモミールにこの葉を加えたお茶で、ゆったりとしたひと

時を楽しむことにしよう。

鼻孔をくすぐる豊かな香りを思い起こして一人満足気に頷いたところで、微かに土を踏む音が聞こえ、彼女は顔を上げて無邪気に微笑んだ。

「こんにちは、もう来ないのかと思ってたわ。それで、どうかしら、代わりの命は手に入った？」

愛らしくも美しい笑みで迎えられた客は、その場に立ち尽くすだけだ。その手には、魔女が渡した短剣が握られていた。

ぐい、と押しやる様に、青年は魔女にそれを震える手で渡した。その顔色は、まるでこの世の者ではないかのように蒼白だった。

彼女は淡く微笑み、短剣を受け取り、躊躇いもなく鞘から取りと抜く。そこには、使われた痕跡はなかった。彼女の手を離れた時と同様に、鈍色の光を放っている。

それが青年の導き出した答えなのだろうと、魔女は一度瞬きし、その長い睫越しに彼を見上げた。

「彼女を、諦めるのね？」

確かめるような静かな問いに、青年は始めはゆるゆると、そして次第に激しく頭かぶりを振る。

「違う……違う、違う！ 彼女を諦めることなんてできるはずがない！ 彼女を取り戻すためには、何だってできる、本気でそう思ったんだ！」

その悲痛な叫びは慟哭となり、やがてすすり泣きの入り混じった囁きへと変わる。

「けど……できなかつた。どうしても、できなかつた！」

拳を握りしめ、その場に崩れ落ちそうなほどに身体を震わせる青年に、魔女は整った形の良い眉ひとつ動かさずに、淡々と言葉を返す。

「それでは約束は果たせないわ。言ったでしょう、命には命の代価が必要だと。残念だけど、恋人は生き返らせられないわ。時間はかかるかもしれないけれど、忘れることよ。あなたはまだ若いもの、これからを見て生きなくちゃ」

短剣をハーブの籠に静かに収め、彼女は無情にも爪先を我が家へと向ける。

その細い背に向かって、青年は叫ぶようにして、彼女を引きとめた。

「待って、待ってくれ、代わりの命ならある！ 俺だ、俺を殺して、彼女を生き返らせてくれ！」

「……あなた、本気で言ってるの？」

「ああ、本気だ、彼女が生き返って笑って過ごせるなら、それでいい、だから、だから……っ！」

そこで初めて、魔女の顔にふ、と陰りがさす。

「それを、彼女が望むと思う？ あなたを犠牲にした生を？」

青年は、その問いには答ええない。けれどその双眸に宿る揺るぎない決意を読み取り、魔女は困ったように首を傾けた。まるで聞き分けのない小さな子供に向かってするような、温かい仕草だった。

「いいわ、ほんの少しだけ、彼女に会わせてあげる。お代はちゃんと頂くわよ」

諦観した口調で言い、青年の背後に視線を投げかける。

「まったく、本当に困ったお馬鹿さんね。ねえ、あなたも、そう思うでしょう?」

魔女の視線を追い、青年は肩越しに背後を振り返り、そして、息を止めた。そこに、彼が求めてやまない姿が佇んでいた。

目をいつぱいに見開き、言葉もなく、ただ手を伸ばす。けれど、その指先は彼女の頬に触れることはなかった。

するりと突き抜け、彼の腕は、虚しく空を掻き抱く。

実体を持たない彼女は、寂しげに破顔した。

そつと開かれた淡い桜色の唇から、音のない声が紡ぎ出される。

『お願い。生きて。』

例えどんなに辛くても、どんなに寂しくても、どんなに悲しくても。

どんなにみつともなくてもいい、どんなにあがいてもいい。

それでも生きていて。

あなたの悲しみの全てを背負うことはできないけれど、傍に寄り添っているから。

いつでも、あなたを見守っているから。

だから、生きることが諦めないで。絶望しないで。

あたしは……傍に、いるから』

もう一度、儂い笑みを浮かべ、その姿は霧のように消えた。空気に溶けてしまったかのようだった。

その場に取り残された青年は、まるで中身のない人形のように立ち

尽くす。

「生きる……だって？ 君を失って、一人で？」

自虐的に呟き、彼は弱々しく首を振った。その頬を、ふいに一筋の涙が伝う。

「聞いたでしょう？ あれが、彼女の望みよ」

諭すような魔女の言葉には、口を引き結んだままだ。

定まらない焦点があてもなく空を彷徨い、やがて魔女の手元、籠の中のそれにはつきりと結ばれた。

そして、悄然と呟く。

「だが、俺は、あんたと取り引きをした。その代価は」

「そうね。でも私は、彼女を生き返らせたわけじゃない。ほんの少し呼んだだけ。だから、あなたの死までは望まないわ。それじゃ多過ぎて、お釣りがたくさん必要なもの」

「なら、何を？」

「ごうしましょう。私はあなたから、これまでの「生」を貰うわ。そしてあなたは、彼女の言葉通りに、これからを生きるの」

魔女の提案に、青年は、無言のままだった。

魔女が青年から代価として取ったもの、それは記憶だった。

この世に生まれ落ちた始まりの日から、魔女の元を再び訪れたその時までの、全ての記憶。大切な人と過ごした日々の喜びに、それを失った瞬間の深い悲しみも、彼は全てを手放した。

それは、彼の「命」そのものではない。けれど、明らかな「生」

の証であり、人間の生命を食らって生きる魔女の糧となりうるものだった。

肌に瑞々しい艶を取り戻した自分を鏡に映し、彼女は、ゆるりと満足げに微笑む。

「やっぱりハーブの効果を待つよりも、「人」を食べたほうが早いわね。本当なら丸々一人分の命が欲しかったけれど、でも、まあいいわ。これで暫くはこの姿を保てるもの」

鏡を覗きこんでクスクスと笑う魔女の姿は、幾ばくか、年齢を遡ったかのようにさえ見える。ローブの裾をつまんでくるり、と爪先で軽やかに回る彼女は、どう見ても愛らしい少女そのものだ。

その口元に大人びた冷たい笑みを浮かべ、魔女はぽつりと呟いた。

「人間ってなんて弱い生き物なのかしら。……そこがまた美味しい所でもあるのだけど」

\*\*\*\*\*

魔女の住む森からふらりと村に戻った青年は、それまでの記憶が全て抜け落ちてしまっていた。己の名も忘れ、何も分らないままにただ空の笑顔からを浮かべる彼に、誰もが心を痛め、憐れみの眼差しを向けた。

人々は魔女の呪まじないだと噂し、これまで以上にその存在を恐れるようになったと言う。

> END <

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0113s/>

---

森の魔女

2011年4月5日07時06分発行